Hospital News

shirousagi

しろうさぎ

島根大学
SHIMANE UNIVERSITY
2013.4.1
vol.32

巻頭特集：島根大学病院は医師養成に力を注いでいきます

■島根大学病院は装いも新たに再出発しました
井川 幹夫 病院長

■特別インタビュー
廣瀬 昌博 センター長
石橋 豊 教授
谷口 栄作 教授

島根大学病院は装いも新たに再出発しました

井川　幹夫 病院長

病院再開発の完了に伴い、4月から全病棟が稼働を開始し、外来棟・中央診療棟もリニューアルオープンいたしました。再開発期間中は、職員の皆さんに多大のご協力をいただき、一方では患者さんにご迷惑をお掛けしましたが、明るく、雰囲気の良い療養環境と優れた診療機能を併せ持つ素晴らしい病院に生まれ変わりました。今年度は、再開発後の病院をいかに活用して診療レベルを向上させるかが大きな課題となります。国立大学病院長会議の資料によりますと、本院は手術件数が少なく、さらに高難度の手術件数も少ない傾向が認められます。地域性の影響もあるとは思いますが、大学病院としての役割を果たすために手術の高度化を図る必要があります。昨年導入したロボット手術支援システム「ダ・ヴィンチ」による前立腺全摘除術は順調に症例を集積していますが、医の倫理委員会の承認を条件にダ・ヴィンチ手術の適応拡大に全面的な支援を行います。ダ・ヴィンチ手術に限らず手術の高度化、手術以外の新たな治療の確立も支援の対象となります。この4月から救命救急センターは基本的に全診療科のサポートにより運営していますが、本院では全診療科が管理当直あるいはオンコール待機の体制をとっていますので、ER型の救急医療を実施しやすい環境にあります。救急医療は病院運営の要であり、また若手医師のスキルアップにおいても重要な位置を占めます。特に総合診療医が備えるべきスキルとして救急医療の診療技術が求められていますので、他施設の救命救急センターと連携した研修プログラムを構築するなど教育・研修体制の充実を図ります。さらに一般社団法人化した「しまね地域医療支援センター」の研修プログラムにおいても救急研修を重点項目として組み込む予定です。本院もこれまで働きやすい職場環境の充実に配慮してきましたが、今年度は院内保育所の定員増加、保育時間の延長、終夜保育日の増加、休業日は年末年始のみ、育児休業中であっても研修などがあれば一時保育可能とするなど院内保育所を利用しやすくしています。

平成23年度、24年度の既設病棟改修中の稼働病床数減少が病院経営に大きく影響しましたが、今年度以降、戦略的運営、計画的な医療機器整備、職場環境の改善、広報活動の強化などにより病院の経営改善を早急に達成します。職員の皆様とともに大学病院としての使命を果たし、地域に貢献していきたいと思いますので、ご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

病院全景（南側）

病院医学
教育センター

医療の質を考えられる医師を育成することも大事

病院医学教育センター 廣瀬 昌博 センター長

昨今、日本の医療は、医療事故をはじめとする“安全”というものがテーマになっています。言い換えれば、医療の質。私がセンター長を務める「病院医学教育センター」では、島根大学医学部附属病院で提供される医療の質および、すべての病院職員の資質向上をめざして、さまざまな取り組みを行っています。病院は従来、医師ばかりが注目されてきましたが、70%を占める看護師をはじめ、臨床検査技師、放射線技師など、さまざまな医療従事者によって支えられています。病院のレベルアップを図るのであれば、医師だけでなく、医師以外の医療従事者の質を向上させていかなくてはなりません。

そのための大きな要素となってくるのが、病院管理や医療管理です。たとえば感染症対策を考えてみても、ひとつの診療科だけの問題にとどまることはありません。病院全体でどのようにリスクマネジメントしていきながら、より安全で患者さんの満足度の高い医療サービスを提供していかなくてはならないのか。それが今、問われているように感じています。

また、地域医療に目を向ければ、医師や看護師を含め医療従事者不足が深刻化しています。そうした人材不足が続いていくと、提供する医療サービスの質も下がり、医療安全や感染対策にも不備が生じてきます。このような状況に陥っているのは、これまで日本の医学部教育が、病院管理や医療管理にあまり力を注いでこなかったことが原因ではないかと考えます。そういった部分の必要性をアピールし、強化できる医師を育てることも今後の課題のひとつです。

もちろん、私も今でこそ医療の質を改善する職務についていますが、外科医として臨床の現場にいた頃は、そこに興味を持つことはありませんでした。でも、臨床現場の経験をはじめ、さまざまな職場で勤務することによって、医療の問題点に気づくことができました。いい医療を提供するにはどうすればいいか。いい病院にするためにはどうすればいいか。それを常に問い続けることが大切ではないかと考えます。

総合医療

総合医、総合力を持った専門医がこれからの地域医療を支えていく。

総合医療学講座・地域医療教育研修センター 石橋　豊 教授・センター長

現在、地域医療に求められているのは、総合医、もしくは総合力のある専門医をいかに育てていくかということです。総合医とはどんな専門分野に対しても、ある程度の知識を持っている医師のことです。なぜ彼らの育成が必要なのか。それは、地域にはさまざまな患者さんが、さまざまな症状を抱えているからです。たとえば腹痛で病院に行った時、担当の先生が皮膚科の専門医だから診察はまったくしないということでは成立しません。どんな症状に対しても、ある程度の診察ができ、専門性が必要な場合はその専門医を紹介できるところまでが地域医療の役割だと思っています。

しかしながら、大学病院は、なかなかそうした総合医、総合力のある専門医を育成する環境にありません。なぜなら、大学病院で受診される患者さんは、より専門医療を求められる方ばかりであり、具体的な症状や病名がわからない患者さんを診察する場数が圧倒的に少ないからです。となれば、地域の医療機関で実践経験を積むしかありません。そのうちのひとつが、大田市立病院内にある大田総合医育成センターです。そこに大学の教授や准教授が赴き、実際の患者さんをはさんで指導することにより、総合医療学を実践的に身につけることができます。しかも、研修医や若手の医師は、地域のさまざまな患者さんと頻繁にコミュニケーションを図れるので、地域に求められている医療とは何かを肌で実感することもできます。

もちろん、総合医や、総合力を持った専門医になるためには、数多くの経験が必要ですし、明確な基準もありません。どんな専門分野でもハイレベルな能力を発揮できる医師は、日本でも数えるほどしかいないと思います。しかし、患者さんと接した時に総合的に診察するという意識を持つことで、視野も広がり、自分に足りないものも自覚できるようになる。その積み重ねが、本当に意味での総合力につながります。私の役目は、そうした総合医療学の種を、これからの地域医療を支える若手の医師たちに植え付けることだと思っています。

地域医療

医療従事者だけでなく、地域全体で医療を支えることが大切。

地域医療支援学講座　谷口　栄作 教授

地域住民が安心して暮らすためには、医療の確保は不可欠です。医療は医師だけで行われるものではありませんが、今、島根だけでなく、全国的に医師不足の状況があり、地域医療を支える医師を育成することは急務となっています。島根では全国一高齢化が進んでおり、複数疾患をもつ高齢者の患者さんが増加する等のニーズに対応して、総合的な視点と技術を持つ医師（総合診療医でだけでなく、総合的に視点を持った臓器別専門医を含みます）が必要とされています。特に総合診療医を目指す学生の多くは、県外に出ていかざる得ない状況を非常に残念に思っていました。そうした想いがあるなか、平成23年、島根大学や県内医療機関、医師会、行政等が連携して、一般社団法人「しまね地域医療支援センター」が設置されました。

「しまね地域医療支援センター」は、各医療機関や行政等と連携して、県内で働く医師が安心して働くことを支援するための組織です。主な業務は「関係者の研修」、「情報発信」、「医師のリクルート」、「医局等と連携図りながら医師のキャリア支援」を行うことです。島根大学には診療科ごとに、長い歴史の中で積み上げられた多くの充実したキャリアパスがありますので、それらと連携を図りつつキャリア支援していきたいと考えています。また総合診療分野については、歴史も浅く、キャリアパスもまだ不十分です。そのため学内外の関係者とさまざまな連携を図りながら、一歩一歩ではありますが、スピード感を持って取り組んでいくことが必要だと考えています。

私は県内外の各地で地域医療の問題について意見交換することがあります。地域の医療機能が低下すると住民は、医療機関や行政を責める場面をよく目にします。医療機関や行政もなんとかしようと一所懸命です。そして有限な医療資源を使っているのは住民であり、その結果が今の状況であることも事実です。地域医療を確保するために、医療機関・行政・住民等地域が一緒になって努力することが求められています。今の地域医療の課題は何か?それを解決するためにはどうすればいいか?医療従事者が何をすればいいか?行政は何をするのか?その地域にすむ住民は何をするのか?そしてその医療機関を活用する患者は何をするのか?それぞれがやるべきことをやる先にしか「地域医療の再生」はないと考えています。

地域医療
教育学講座

大学病院の使命と地域医療教育

島根大学地域医療教育学講座　熊倉　俊一教授

わが国の医学・医療はこの半世紀で著しい進歩と発展を遂げ、今や世界最高の水準に達するに至っております。その一方、医療の高度化や地域の高齢化による医療の需給バランスの変化、患者の受療行動の変容や若手医師の都会志向等多様な要因に起因して、地域医療を支える人材が減少し、今や、地域医療はかつて想像もし得なかったほど困難な情況に立ち至っております。私ども人の健康を守り、命を預かる者は、その社会的使命を十分認識すると同時に、今後ともより一層、地域社会に寄与する責務を負っているものと思われます。かかる時代の趨勢を考慮し、島根大学医学部は、地域医療の担い手の育成の課題に真摯に取り組み、教育改革を実行して参りました。全国でもユニークな島根大学方式地域枠推薦入試による地域医療に使命感と意欲のある人材の発掘と選抜、入学後の乙立里家診療所でのプライマリケア実習や県下約50の医療機関と連携した地域基盤型臨床教育の充実（図1）、卒後初期臨床研修における地域医療研修の拡充や専門（後期）研修での地域医療機関での研修を取り入れたプログラムの構築など、地域医療教育の改革を図ってきました。特に、専門研修においては、大学病院機能の向上と地域医療への貢献を目指し、本学が主幹校となり神戸大学、鳥取大学及び兵庫医大の4大学連携、あるいは、東京医科歯科大学と本学、秋田大学の3大学連携による文科省高度医療人養成事業を推進してきました。本事業は、全国でも極めて高い評価を得る事ができ、4大学連携事業は全国1位、3大学連携事業は全国2位の評価で採択されました。本事業により、若手医師に対するキャリア形成支援の充実とプログラムの可視化を実現することができ、大学病院を軸とした魅力的な医療人材育成を図ることができました。更に、大学院修士課程に、「地域医療支援コーディネータ養成コース」や「医療シミュレータ教育指導者養成コース」を新設し、地域で活躍する医師をはじめとした医療人を支援する人材の育成を進めてきました。また、グローバル化に対応して、国際的視野をもった地域医療人を育成するため、海外の医療機関と連携し、海外研修の企画・運営を行なってきました（図2）。これらの取組みは、学内においては、地域医療教育学講座や卒後臨床研修センター、病院医学教育センター、島根県の寄付講座である地域医療支援学講座、大田市の寄付講座である総合医療学講座及び各講座が協力・連携体制を構築して、実施してきたものであります。

この春、第2期地域枠卒業生が誕生しました。現在、各学年10名の地域枠学生、3名の学士地域枠学生、5名の緊急医師確保枠学生及び7名の県内定着枠学生が在籍しております。それら在校生に地域枠等卒業生を加えますと、この春の時点での地域枠等学生・卒業生数は150名を超えます。地域枠等学生・卒業生が漸次、増加する現状に対応して、地域医療人育成を強化・活性化し、地域医療を担う人材の継続的かつ安定的な確保と地域定着を図るためには、地域医療を担う若手医師が、多様な地域医療のニーズに応える臨床能力を修得することができ、かつ、地域医療に対する探究心や学術的魅力の涵養を通じて、地

図1. 地域医療実習

域医療に対する意欲や使命感が向上できる教育・指導環境の構築・充実が不可欠であると考えます。そのためには、今後、地域医療を担う若手医師の育成に資する指導者を養成し、指導者を核とした魅力的な教育支援体制を築いていくことが必要と思われます。地域医療現場における教育的配慮または研究の機会の欠如は、地域医療の担い手の勤労意欲の低下と地域定着を阻む要因となるため、地域医療の未知の課題へ自ら取組むとともに、解決を図り、地域医療のリーダーとして地域医療のフロンティアを拓くことができる卓越した資質を備えた地域医療の指導者を養成し、地域医療の担う若手医師の教育指導体制を構築・充実させることが大切と考えられます。今後、大学病院が中心となり、地域医療の指導者の養成と指導者が地域に定着し、後輩の指導を実践できる体制の整備を図っていきたいと考えております。

更に、地域医療に貢献する人材を育成するにあたり、医師の地域偏在と診療科偏在の是正を目指した地域における医師の適正配置を推進することが重要になります。現在、地域の診療科別専門医の不足・地域偏在に対応した地域ごとの専門領域毎の医師需要数を反映させた医師養成・配置計画の視点は、少なくとも本県行政にはなく、今後取組むべき課題であります。それに関連して、大学・医局の医師派遣システム、大学医局のあり方についても、検討が必要であります。わが国の初期臨床研修修了者の半数が大学に戻らず一般病院で研修を続ける現状、及び、初期臨床研修後に専門を持たず、生涯にわたり教育を受ける機会を持たず、専門医取得も目指さない医師（別名：フリーター医師）が増加しているデータも示されており、このような増加を辿る“非入局”若手医師のキャリアを、どう出身大学がマネージメントしていくか、その必要性も含めて検討していく必要があると思われます。

高度先進医療を提供する役割を担うとともに、地域医療への貢献が重要な責務である大学病院においては、地域の機関病院等と有機的に連携して、明日の地域医療の担い手の育成を牽引し、地域のニーズに応じた透明性のある医師配置を先導できるように大学病院としての機能を従来以上に充実、発展させ、本県はもとよりわが国の医療レベルの向上に大きく寄与することが今求められていると思われます。

図2. ワシントン大学研修（パウ教授と研修医、医学生）

卒後臨床研修センター

島根大学医学部附属病院・卒後臨床研修センター

卒後臨床研修センター長　医学部内科学講座内科学第四・教授　田邊　一明

現在の限りなく専門化している臨床医療の分野でも、救急の最前線、日常診療、専門検査・治療、延命の医学と多岐にわたる医療において「医師として患に触れる人間関係」が何よりも重要であり、全人的な医療を心がけることが大切です。島根大学医学部附属病院卒後臨床研修センターでは、「診療能力も、研究心の芽生えも、患者を全人的に見る・聞く・話すから生まれる」を理念として掲げ、医師としての総合的人間力を育成します。そして地域医療に必要なプライマリ・ケアを行える十分な基本的診療能力を獲得する事ができ、先進医療も学べる臨床研修を行っています。

研修医時代に必要なことは、受け持つ患者さんやご家族からゆっくりと話を聞き、丁寧に診察し、病態を調べ、鑑別診断を考え、投与されている薬の作用を調べ、必要な検査について勉強し、手技やその合併症への対応をシミュレーションし、貴重な経験を積み重ねていくことです。そして相談したい時に各診療科の専門医が揃っていることも重要です。また、高齢化の進む中で、単科だけでの診療は考えられない状況になってきており、各診療科、コメディカル、さらには地域医療機関との協調もスムーズに行えるよう、チーム医療としての役割が果たせることも私たちの使命です。医師としてスタートする研修医時代には時間をかけて勉強することが必要であり、島根大学医学部附属病院では、指導医とともに「きっちり労力をかけて学んだことは、どこかで必ず役に立つ」教育を実践しています。

島根大学の卒後臨床研修では、島根県と一体となって地域医療の実践的教育に力を入れています。年ごとに研修協力施設は増加しており、県外での研修も可能となっています。「大学病院2年間コース」に加えて、県内病院や青梅市立病院、東京医科歯科大学附属病院、宇治徳洲会病院、大隅鹿屋病院での一年間の研修を選択できる「たすきがけコース」、「総合医育成コース」、「産婦人科重点コース」、「小児科重点コース」、「外科重点コース」を準備し、各自が目標とするキャリアステップにスムーズに移行できるよう、魅力的で自由度が高い研修プログラムを準備し改良を重ねています。神様をお迎えする出雲の地で、皆様をお迎えします。

平成24年度卒後臨床研修センター・オリエンテーション

泌尿器科

手術室でiPadを!

泌尿器科　椎名 浩昭 、安本 博晃 、平岡 毅郎

iPadを手術室で使う理由は何ですか?そう聞かれたら、「目新しいから」、あるいは「見栄えが良いから」・・そんな答えがでるかもしれません。では、本当はどうでしょうか?理由はずばり、画像を主体とする情報を手術チームで共有することが出来るからなのです。画像といってもたくさんあります。患者さんのレントゲン写真、これが一番大事です。この情報をもとに、私たちは手術の前に十分予習をして、手術がより安全に効率よく進行するようにしています。しかし、実際の手術では、時として予想と異なる状況に遭遇します。その時にiPadにいれていた画像を再度呼び起こし、もう一度、手術チーム全体で確認するのです。

最近は使い勝手のよいiPad関連機器も増えてきました。Apple TVという小さな機器を使って無線でiPadの画像を手術室のモニターに飛ばせば、iPadの周辺の配線が邪魔になることはありません。そうすればみんなの目で情報を共有しながら、解剖を確認しながら、手術を進めることが出来るようになります。手術はチームで行う医療行為なのです。独りよがりであっては決して安全な手術はできないのです。

最近は泌尿器科ではロボット手術、ダビンチを使用した前立腺全摘除術を行っています。術者はサージョンコンソールといって、手術台から少し離れたところで、ロボットを操作することになります。一見、一人で孤独に手術をしているように見えますが、声を掛け合って、疑問が出ればiPadの画像をモニターに映して再確認しますし、またiPadのアプリでスケッチを書いて、術中に説明することも出来ます。また、iPadにいれてある解剖図譜を取り出して、術中に正常解剖と比較する、あるいは正常構造を再確認することが簡単に出来るようになりました。このようにiPadを使うことによって情報の共有がより強固に確実になるため、結果として安全で正確な手術が可能になるのです。

しかし、手術室の看護師さんたちにはあまり評判がよくない点もありました。そうです。少し不注意に扱うと清潔が不潔になってしまうからです。そこで、iPadをより清潔にするためにも先のapple TVを用いて無線でモニターに画像を映し、また点滴棒にiPadを確実に固定できる器具も購入しました。これでもう完璧です。

iPadを手術室で使う理由は何ですか?・・自信を持って答えましょう!手術チームで情報の共有をより強くし、安全で正確な手術を患者さんに提供するためです。と!

手術支援ロボットダヴィンチによる前立腺全摘除術時に、iPadの画像を手術室のモニターに映しています。

手術支援ロボットダヴィンチによる前立腺全摘除術時に、術野の説明をiPadアプリを使って手術室のモニターに映しています。

看護部
救命救急
センター

救命救急センターにおけるJTASを用いた院内トリアージの導入

看護部　救命救急センター　看護師　遠藤　篤也

平成24年10月1日より、救命救急センターが稼働することとなり、以前から来院患者さんに対して診察前に問診を行いトリアージしていました。平成24年度の診療報酬改定にともない「院内トリアージ実施料の算定」が可能となり、当院でも平成25年2月より導入しました。平日夜間と土日祝日の終日に救命救急センターを受診した患者さん（全員該当するとは限りません）に、JTASを用いた 院内トリアージを実施しています。

院内トリアージとは、患者さんが来院後、看護師がすみやかに状態を評価、観察し緊急度を判定し診察の優先順位を決定することです。院内トリアージを行うにあたり、JTAS(Japan Triage & Acuity Scale、緊急度判定支援システム)というシステムが日本臨床救急医学会や日本救急看護学会を中心に検討され、開発されました。これは緊急度を5つに区分し、対応方法をマニュアル化したものです。iPadを使い、症状やバイタルサインをもとに緊急度が判定されます。これによって講習を受け訓練した看護師であれば、誰でも同程度の判断ができ、患者さんへの安全・安心な医療の提供につながっています。

私たち救命救急センターのスタッフの半数近くが昨年JTASの講習を受け、適切な院内トリアージができるように訓練してきました。緊急度が高い患者さんを今まで以上に優先的に診療していけることを目標に取り組んでいます。

しかし、院内トリアージによる緊急度の判定は救命救急センターの混雑状況やマンパワー不足によっては、必ずしも万全なものとはいえないのも実状です。院内トリアージの直接的な実施者は看護師ですが、医師、事務職員など他職種の協力のもとに成り立っています。

近年、救命救急センターを受診する患者さんは年々増加しています。特に高齢の患者さんが多い現在では、重症化しやすい傾向にもあり、それぞれの職種の専門性を活用してより効果的な院内トリアージができるように日々頑張っています。

私たちが取り組んでいるJTASを用いた院内トリアージシステムを有効に機能させるために、今後は定期的にトリアージ記録の検討や事後検証を行い、質の維持・向上に努めて行きたいと思います。職員の皆様にも救命救急センターを受診された際にはご理解、ご協力をお願いします。

JTAS講習風景

iPadを用いたJTAS講習風景

内　科

認知症マススクリーニングのための iPadアプリ-CADi-

医学部内科学講座内科学第三・教授　山口　修平　学内講師 小野田　慶一

年をとると記憶や判断力などの機能が落ちてきます。認知症とは，脳の器質的障害によりそうした認知機能に障害がおこり，社会生活に支障を生じた状態のことを指します。日本は高齢化社会を迎え，近いうちに認知症患者は300万に達すると推計されています。認知症では，一旦障害された知的機能は基本的に元に戻らないため，その対応には早期発見が非常に重要となります。早期発見により，治療が開始できれば認知機能の低下を抑制することができます。

早期発見には，住民健診で多数の方を対象に一斉に検査を行うことが有効な手段の一つとなります。しかし，現在標準的に用いられているスクリーニング検査は熟練した検査者が必要であり時間もかかります。そこで我々は，熟練した専門家でなくても検査でき，住民健診などの多人数を対象とした場面でも並列で運用できるスクリーニング検査をiPadアプリケーションとして開発しました。このアプリケーションをCognitive Assessment for Dementia, for iPad version（CADi）と名づけました。

CADiはタッチパネル型コンピュータであるiPadをプラットホームとして選択したことで，参加者が自立的に検査を受けることができます。タッチパネルは高齢者にとってマウスやキーボードよりも抵抗感が少なく優れたインターフェースといえ，楽しみながら検査に参加いただけます。

住民健診におけるCADi検査の様子

CADiは記憶や判断力を問う10個の問題で構成されており，10点満点で認知機能を評価します。目安としては5点以下だと認知症を疑います。平成24年度では島根県内の4市町の住民健診で2437名の方にCADi検査に参加していただきました。その中から認知症の治療が必要な方を20名，また軽度の認知機能低下もしくは認知症リスクの高い経過観察が必要な方を38名見つけることができました。認知症のマススクリーニング検査としてCADiが有用であることが確認されました。

CADiはすでにApp Storeにて公開されており，無料でインストールできます

https://itunes.apple.com/us/app/cadi/id586052447

iPadをお持ちの方はぜひお試しになり，ご自身の認知機能をチェックしてみてください。

CADiの設問の一つ「カテゴリー選択」

腫瘍センター病棟

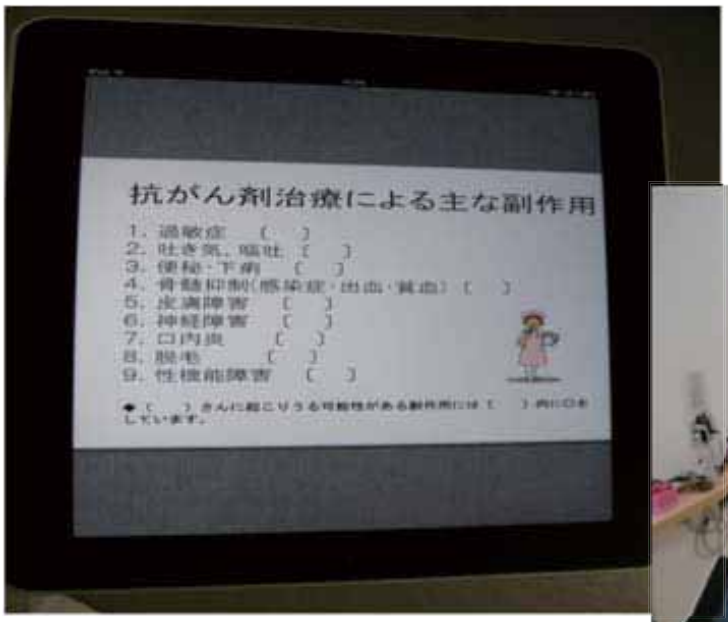
iPadを使用して

腫瘍センター病棟

腫瘍センター病棟は、造血器の悪性腫瘍、固形がんに対して化学療法を中心とした治療を行うフロアです。病棟は、無菌監理区域と一般病床に分かれており、骨髄移植を受ける患者さんや各診療科で抗がん薬治療を受ける患者さんが入院されています。

がん化学療法においては、投与中に起こる過敏反応や骨髄抑制による感染予防、身体的精神的な側面における副作用対策など、患者さんにとって必要な情報提供をおこなうことがとても重要です。

そこで、がん化学療法に関するオリジナルのパンフレットを作成しております。iPad内にもパンフレットと同様の内容を導入し具体的な説明を行いたい時などiPad使用して患者様に情報提供を行っております。今後は患者さんの個別性により対応できるよう、パンフレットには記載しきれない様々なパターンを挿入するなど活用方法等検討したいと思います。



歯科口腔外科
マタニティ歯科

マタニティ歯科外来を開設しました

歯科口腔外科マタニティ歯科外来　医長　辰巳　香澄

歯周病は、成人において罹患率の最も高い疾患の1つです。お口の中だけでなく、動脈硬化や誤嚥性肺炎、糖尿病など全身疾患にも影響を及ぼすことがわかってきました。また近年は、妊娠期の歯周病により早産・低体重児出産のリスクが増加するという報告もあり、その関連が注目されています。

妊娠中はつわりや嗜好の変化、食事回数や女性ホルモンの増加などにより、歯周病や齲蝕の増悪などのお口のトラブルが起こりやすくなります。また、齲蝕原因菌は母子感染によってお母さんから乳幼児へうつることがあります。このことから、お母さんの健康のみならず、生まれてくる赤ちゃんの身体の健康、お口の健康を守るため、産科と連携してマタニティ歯科外来を2月に開設しました。まず、母親教室での口腔衛生指導後に初回無料の歯科健診を行います。そこでお口のご病気が見つかれば、リスクに合わせて当外来またはかかりつけ歯科にて治療を行います。出産前には生まれてくる赤ちゃんの口腔ケアについても指導します。

われわれの介入により、早産・低体重児出産や齲蝕の母子感染を減らすことができればと考えています。妊婦さんが安心して出産・育児に臨めるよう、スタッフ一同頑張ります。

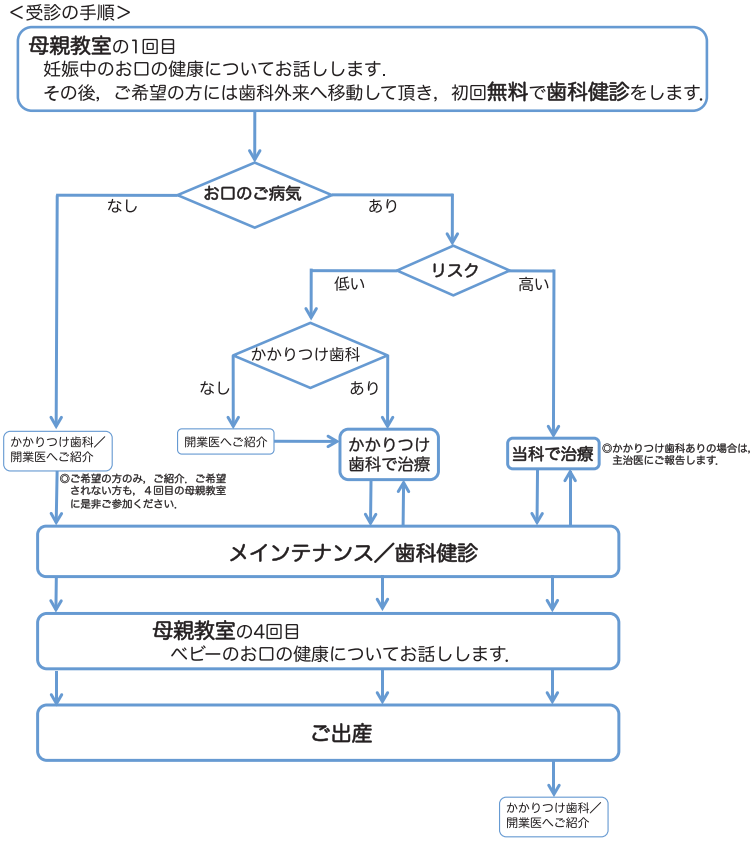
マタニティ歯科外来のご案内

歯科口腔外科

妊娠中はつわりや嗜好の変化，食事回数や女性ホルモンの増加などにより，お口のトラブルが起こりやすくなります．歯周病菌の感染や作られる炎症性物質の影響で，早産や低体重児出産のリスクが高くなることが報告されています．また，ムシ歯菌は母子感染によってママから乳幼児へうつることがあります．

ママ自身だけでなく，生まれてくる赤ちゃんの健康のためにも，歯科医師によるお口の健康チェックを受けましょう．ムシ歯や歯周病などは，早めに治療しましょう．

＜受診の手順＞



放射線部

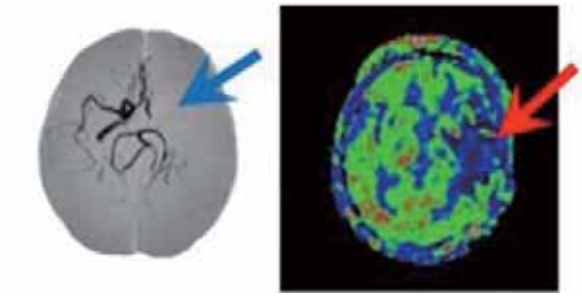
新しいMRI検査方法のご紹介

放射線部　MRI検査室　宮井　将宏

昨年末に行われた3T-MRI装置のバージョンアップにより、以下の四つの新しい撮影が可能になりました。これらは造影剤を使いませんので、腎機能低下や造影剤アレルギーの方でも安心して検査を受けることができます。もちろん、MRI検査ですので被ばくの心配はありません。しかし、磁力と電磁波を使うため、患者さんの状態によっては検査を受けられない場合があります。
それぞれの撮影は数分程度ですが、位置合わせや他の撮影などを含めると、1回の検査時間は20分から40分程度です。

①非造影脳血流撮影

- 脳の血流状態を評価するための検査です。
- 脳梗塞や脳腫瘤の診断に有用です。
- 撮影時間は5分前後です。

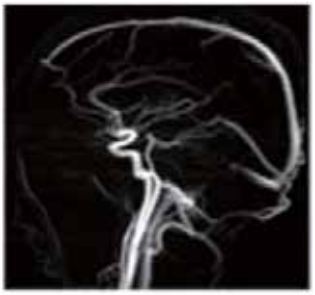


非造影脳血流動態検査

左の写真で血管が写っていない部分(青矢印)が、右の輪切り写真で血流も悪くなっていることがわかります(赤矢印)。

②非造影頭部静脈撮影

- 頭部の静脈を評価するための検査です。
- 脳静脈血栓症や脳血管奇形の診断に有用です。
- 撮影時間は5分前後です。



③非造影腎動脈撮影

- 腎動脈を評価するための検査です。
- 腎動脈狭窄症や腎移植評価の診断に有用です。
- 撮影時間は6分前後です。

④非造影下肢動脈撮影

- 下肢の動脈を評価するための検査です。
- 下肢閉塞性動脈硬化症の診断に有用です。
- 撮影時間は20分前後です。

総務課

カザフスタン セメイ国立医科大学との交流協定の締結

総務課

島根大学は1月28日にカザフスタン共和国のセメイ国立医科大学からトルベイ・ラヒフベコフ学長を迎え、大学間交流協定を締結しました。

セメイ国立医科大学は、カザフスタン共和国のセメイ市（旧セミパラチンスク市）に位置する大学で、カザフスタンでは多くの医師を養成していることで有名です。この協定は島根大学医学部総合医療学講座の野宗義博教授が発議者となり、同医科大学ナイラ・チャイジュヌソバ教授をはじめとする関係者と長年現地支援に取り組んできた実績と成果が結びついたものです。今後は、旧ソ連時代に450回以上も行われた核実験で多くの健康被害を受けたセメイ市地域住民への医学的支援を行い、住民の健康維持に貢献すべく医師の相互派遣による共同研究、研修医の受入、検診等が計画されています。

松江キャンパスでの調印式のあと場所を医学部に移して、医学部教員との交流会、学生や教職員を対象とした記念講演会を開催しました。講演会ではトルベイ学長による大学紹介ビデオ、ナイラ教授によるセミパラチンスクの現状、そして広島大学星名誉教授による放射線被ばくの実態などの話に、100名を越す聴衆が熱心に聞き入っていました。参加した学生から「東日本大震災についてどのように感じられたか」という質問が出るなど、“放射線被ばく”“核実験”がキーワードとなった今回の講演では、これらに対する関心の高さが伺えました。

近くに原発を抱える本学と、核実験場を抱えていたセメイ国立医科大学との協定締結の意義について改めて認識するとともに、今後の両校の積極的な交流に期待が寄せられます。

小林学長とトルベイ学長

医学部関係者と記念撮影

卒後臨床研修センター

4年間の認定証が届く!
～NPO法人　卒後臨床研修評価機構～

卒後臨床研修センター・副センター長　鬼形　和道

平成25年1月31日にNPO法人卒後臨床研修評価機構の評価を受けました。最初に、ご協力いただいた多くの部署の多くの関係者の皆さま、そして研修医の皆さまには心より感謝申し上げます。前回指摘された問題点に対する各部署での取り組みが評価され、今回は4年間の認定証をいただくことができました。評価結果報告書の一部を記します。

「貴院は大学病院として、また地域中核病院として教育、診療の役割を十分に果たし、臨床研修においても熱心に取り組んでいます。前回受審時に指摘された不十分な点への改善も漸次なされています。その延長線上で、貴院での救急体制とそれに連動する救急研修とを一層強化することについて、並びにインシデントレポートに代表される医療安全に対する意識を向上させることについては更なる検討を要します。また、CPCを開催すること自体の重要性や研修医がCPCに参加することの重要性を病院全体の課題としてとらえる必要があります。しかし、研修医の満足度は高く、優れた研修プログラムの下で臨床研修をしていると評価します。今後一層の尽力を期待します。」

今後の課題を以下に記します。

1.臨床研修病院としての環境整備
　救急医療分野の研修、CPCへの出席
2.医療に関する安全管理体制
　研修医のインシデントレポート数
3.適切な研修プログラムの策定
　プログラムにおけるSBOsの明示
4.研修評価システムの確立
　EPOC入力の迅速化
5.研修医の医療行為のチェック体制
　研修医の記載した診療録の確認

毎年、研修カリキュラムの改善を図り、良質な医師の養成を目指しています。大学病院コース、たすきがけコース、総合医育成特別コース、そして重点（産婦人科・小児科・外科）コースを選択してくれた研修医の皆さんを病院職員全員で支援して行きましょう。島根の医療を担い、後輩を育成する指導者を育成することが私たちの使命のひとつです。

今夏、研修医の病院における個室性を重視したセンターが完成予定です。そこでは、さらに魅力的な研修医の笑顔に会えるでしょう。

病院内ラウンド

合同面接調査

認定書

医療
安全管理

平成24年度　医療安全訪問を終えて

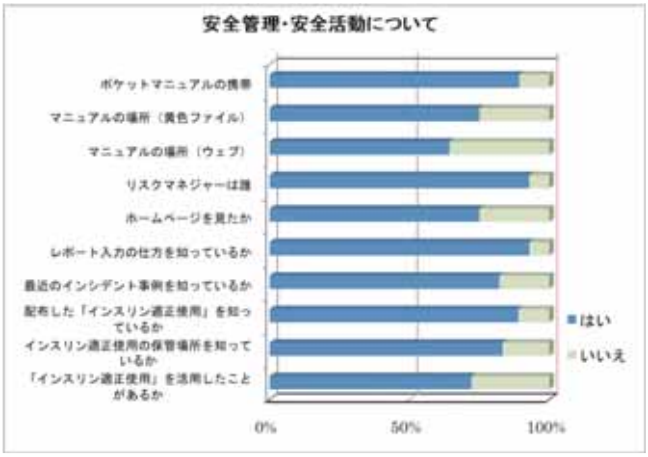
医療安全管理室 GRM　園山珠美　副室長　廣瀬昌博　室長　山口修平

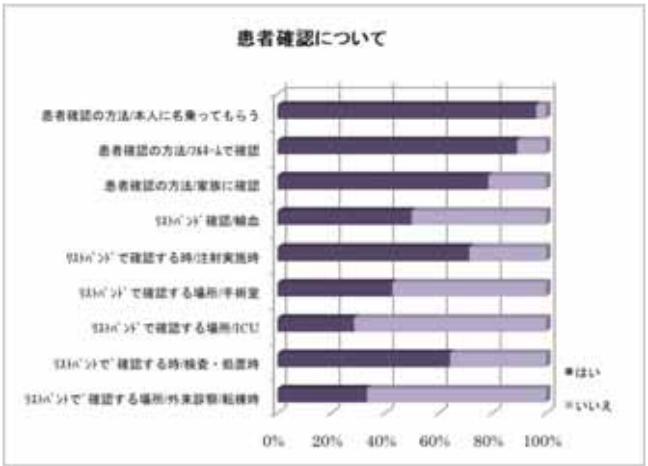
医療安全管理室の役割は、医療事故の防止及び医療の質の向上を図ることですが、その活動の一環として、院内部署訪問による安全点検と指導・助言（医療安全訪問）を毎年1回実施しています。本年度も1月22日～2月4日に、安全管理意識の向上と基本行為の定着を目的に医療安全訪問を実施しました。医療安全管理委員会のメンバーが3人1グループになり、病棟、中央診療施設、特殊診療施設、診療支援施設、事務部など計27部署のラウンドを実施いたしました。そこで各部署の医師または看護師等1名以上を無作為に選び、安全に関する質問をさせて頂きました。当日ラウンド時に対応してくださった方々には、お忙しい中協力して頂き大変感謝しております。

医療安全訪問の結果を表に示します。基本的な安全活動に関してはほぼ遵守されておりましたが、HPに掲載している「リスクまねじめんと通信」やWebに掲載している安全マニュアルの認識がまだ不十分でした。またインスリンの適正使用のためのマニュアルを配布していますが、その利用が一部の部署で不十分な状況でした。患者確認については、声かけ確認は行われているようですが、リストバンドによる確認がまだ不十分でした。輸血事故や患者間違いなど時に重大な事故につながりますので、マニュアルに記載された手順の遵守をお願いいたします。

本年度は昨年度と比較して、インシデントレポートの件数が増えております。特に転倒転落、投薬間違い、チューブ関連のインシデントが多く発生しております。その理由の一つとして、病院再開発の途中で環境変化が大きかったことが挙げられます。しかし事故が発生しますとそういった言い訳は通用いたしませんので、常に医療安全の意識を持ち続ける必要があります。

医療安全においてはなんといってもコミュニケーションが大切です。まずは医療スタッフ間のコミュニケーションを十分に図り、連携不足を解消することが重要です。さらに医療トラブルを防止する上では、患者・家族とのコミュニケーションが重要となります。今後、医療安全管理室としましても、日々のラウンドに加えて部署への安全ラウンドを高頻度に行い、現場リスクマネジャーとの連携・協力を図っていきたいと考えています。医療安全に関してのご意見、ご質問がありましたら医療安全管理室まで遠慮なくご連絡ください。





会計課
経　営

第1回島根大学医学部附属病院経営懇談会を開催しました

附属病院経営企画戦略会議（会計課経営支援室）

25年2月1日（金）第1回の島根大学医学部附属病院経営懇談会を開催しました。
この懇談会は，外部有識者を招き，病院の管理運営，経営改善及び臨床教育改善などについて意見を得ることを目的としています。

外部有識者としては，広島大学病院 整形外科 診療科長・教授 越智光夫氏（前広島大学病院病院長），社会福祉法人 恩賜財団 済生会熊本病院 院長 副島秀久氏（元日本クリニカルパス学会総会会長），並びに，公益財団法人 星総合病院 理事長 星北斗氏（元日本医師会常任理事）をお招きし，本院からは，井川幹夫病院長，副病院長及び診療科長等のメンバー12名が出席しました。

当日は，病院再開発事業により，ほぼ完成した外来中央診療棟の各施設及び新病棟（C病棟）の視察を行った後，本学の会議室で懇談会を開催し，病院運営改善・診療体制整備状況，高度医療人育成事業の取組，医師・看護職員確保対策及び地域医療連携など，病院運営全般に亘り幅広く活発な意見交換が行われ，大変有意義なものとなりました。

特に有識者の方からは，リニューアルされた各施設や最新の医療機器を活用し，新たな教育・診療・治療や経営改善の取り組み及び県内救急医療支援の取り組みなど，積極的に病院の管理・運営に着手されており，今後が期待されます。また，近年全国的に見ても大学病院の看護職員の離職者数が多いが，貴院は大変少なく，これは専任の教育担当看護師長・看護師（4名）を配置するなど各種支援体制が整備されている結果であり，今後も継続的に取り組まれますようにとの発言がありました。

今回頂いた意見（提言）は，「附属病院経営企画戦略会議」を中心に各委員会等に諮り改善等に取り組むこととしています。

＜懇談会風景＞
（正面左：越智委員，中央：副島委員，右：星委員，右下：井川病院長）

総務課

平成24年度島根県原子力防災訓練に本院が参加しました

総務課総務係

「平成24年度島根県原子力防災訓練」が，1月26日（土）に，関係職員の技術の習得，関係機関相互の協力体制の強化，緊急時における迅速かつ的確な医療活動の実施を図ることを目的に，中国電力㈱，日本赤十字社島根県支部，島根県放射線技師会，松江赤十字病院，松江市立病院，島根県立中央病院，島根大学医学部附属病院，松江市消防本部，広島大学，島根県等の参加により実施されました。

主な訓練の内容は，原子力発電所における汚染等患者発生時の初動対応及び通信連絡，汚染等を伴う救急患者の救急車両及び防災ヘリによる搬送，被ばく医療機関における除染等の処置，汚染等患者情報の迅速な伝達及び安定ヨウ素剤調製訓練でした。

1月26日（土）午前8時00分，本院救命救急センターに，島根原子力発電所から作業員6名が床面に転落，広範囲に放射能汚染があり，骨折の疑いもあると第一報の情報提供がありました。

橋口救命救急センター長から，総務課総務係に連絡が入り，井川病院長に受入れの可否について確認をした後，放射線部技師長，看護部長に連絡を取り，除染チーム（医師1名，看護師2名，放射線技師2名）を組織しました。

午前9時30分，防災ヘリにより搬送された患者を，救命救急センター蘇生室において，本院放射線技師が放射能測定を行った後，骨折部位の放射線撮影，医師・看護師が除染と外傷部位の処置を行い，入院となりました。

訓練終了後には，本院訓練参加者と島根原子力発電所職員との反省会を行い，養生の方法，受入れから治療までの手順，緊急時に備えた必要物品の保管等について，今後の連携を含め確認を行いました。《本院参加者：救命救急センター 橋口センター長，救命救急センター 遠藤看護師，勝部看護師，放射線部 尾崎診療放射線技師，金山診療放射線技師　中国電力㈱参加者：放管員3名，看護師1名，患者役1名》

また，この訓練に併せ，島根県原子力発電所事故による原子力発電所から30km圏内の住民620名による30km圏外（大田市，出雲市，雲南市，安来市）へのバス等による広域避難訓練も行われ，各避難所では，放射線技師による避難住民に対するスクリーニング（被ばく検査）のデモが行われました。《本院参加者：放射線部 原診療放射線技師》

搬送された患者及び同行の島根原子力発電所職員

除染等を行う本院チーム（於：救命救急センター蘇生室）

総務課人事
労務担当

平成24年度病院長表彰

総務課人事労務担当

平成24年度医学部附属病院の運営に顕著な功績等があったとして，3月13日に個人14名，治験実施チーム，助産師外来チーム，会計課の職員が病院長表彰を受けました。
今年度は，救命救急センターに派遣され救命救急医療の礎に尽力した方々をはじめ研修医教育に功績のあった方，また，助産師外来において新たな取り組みを実施し患者サービスの向上に貢献された方，病院の再開発に携わった多数の方々が受賞されました。
受賞者は次の方々です。

【DA-9501治験実施チーム】
麻酔学講座　齊藤洋司教授/今町憲貴講師
麻　酔　科　二階哲朗講師
整形外科　山本宗一郎講師/桑田卓助教/
山上信生助教
集中治療部　太田淳一助教

古田賢司（消化器内科講師）
玉川祐司（消化器内科助教）
門田勝彦（神経内科助教）
小谷暢啓（循環器内科助教）
濱口俊一（呼吸器・化学療法内科助教）
奥山圭介（内分泌代謝内科医科医員）
松原　毅（消化器外科助教）
渡邊正章（歯科口腔外科歯科医員）
柴田　宏（検査部　臨床検査技師長）
吉野　功（検査部　主任臨床検査技師）
柳楽有香里（放射線部　事務補佐員）
岩田春子（入退院管理センター　副センター長）
岩田章史（リハビリテーション部　元療法師長）
畠山留美（看護部外来3階　看護師長）

【B病棟3階・産科婦人科外来チーム】
（看護部B病棟3階・産科婦人科）
山本雅子副看護師長/岡田早苗副看護師長/
伊藤亜津子副看護師長/堀内あさみ助産師/
竹田美也子助産師/数森和栄助産師/
金築恵美子助産師）

【会計課・病院再開発担当】
井田昇課長補佐/渡部晃専門職員/
佐々木敏幸病院調達係長/日次裕久係員/
西村修平係員

受賞された方々

総務課

うさぎ保育所の保育時間延長や土日の保育日を増やしました

総務課　総務担当

本学医学部附属病院では、平成18年4月1日より院内保育施設「うさぎ保育所」を開設し、運営を行っています。

平成24年度には、定員を68名に増員するとともに、一般保育業務と病児・病後児保育業務を併せて専門的な業者に委託し、連携することで、保育内容の充実を図ってきました。

平成25年4月からは、教職員の方々からの声を基に、子育て支援・女性のための職場作りの一環として、下記のとおり更なる保育内容の充実及び利便性の向上を図ってまいります。

(1)定員を75名に増員します。

(2)基本保育時間を7時30分から19時までとし、19時以降は延長保育(場合により終夜保育)でのご利用となります。

(3)終夜保育は、原則として毎週火曜日・水曜日・木 曜日に実施します。

① 基本保育利用者:1回につき1,000円、夕食費:300円、朝食費:200円

② 一時保育利用者:1時間につき200円、夕食費:300円、朝食費:200円

(4)休所日を12月29日から翌年1月3日までの6日間のみとし、これまで休所日としていた毎月第3土曜日・日曜日も保育日とします。

(5)育児休業中の方は、保育所の利用ができませんが、一時預かり保育の利用を希望される方で、特別な事情(学会・研修等)がある場合は、定員の状況に応じて対応します。

なお、うさぎ保育所ホームページには、入退所の手続き等のほか、毎月の行事のご案内や「うさぎだより」(一部抜粋)等も掲載しておりますので、下記URLによりご覧ください。

http://www.med.shimane-u.ac.jp/hospital/usagi/index.html

総務課
総務係

本院が島根県の二次被ばく医療機関に指定されました

総務課総務係

本院は、平成25年2月21日付けで島根県から二次被ばく医療機関に指定されました。

「被ばく医療機関」とは、原子力災害による被ばく・汚染患者が発生した場合に、緊急的に施設従業員や周辺の地域住民に対して医療を提供するものです。

島根県では、今まで島根県立中央病院が県内唯一の「二次被ばく医療機関」として位置付けられていましたが、平成23年3月11日の東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所事故では、福島県唯一の「二次被ばく医療機関」に患者が集中する状況となったことから、県内における「二次被ばく医療機関」配置の拡大が必要となっていました。

本院が「二次被ばく医療機関」として位置付けられ、地域住民の安全・安心の確保及び県内緊急被ばく医療活動体制の更なる充実を担うこととなります。

初期被ばく医療の後、汚染の残存する者及び相当程度の被ばくをしたと推定される者に対しては、県立中央病院及び本院において、救急医療の施行、高線量被ばく患者の診断・線量評価・治療の開始、内部汚染に対する診断・治療の開始、重症患者の後方搬送の判断等被ばく患者の入院加療を含む医療を行います。

初期被ばく医療機関（14病院）：松江赤十字病院、松江市立病院、松江生協病院、松江記念病院、玉造厚生年金病院、安来市立病院、雲南市立病院、平成記念病院、奥出雲病院、飯南病院、出雲市民病院、出雲市立総合医療センター、出雲徳洲会病院、大田市立病院

二次被ばく医療機関（2病院）：島根県立中央病院、島根大学医学部附属病院

三次被ばく医療機関（2施設）：広島大学、放射線医学総合研究所

栄養
治療室

笑顔(*^▽^*)を提供する「焼き芋機」の導入

栄養治療室

2年前から、地元で開発された焼き芋機「おもいやりくん」（写真）を導入し、小児センターや緩和病棟のパントリーで焼き芋を焼いて提供しています。入院患者さんや院内のスタッフにおいても病院内で焼き芋を焼いて出すという試みをとても意外に思われ、芋を通じて食の楽しさと「地域発」という安心を提供しています。

「おもいやりくん」は、出雲市斐川町の元高校教諭福田豊さんが完成させたものです。県産資材で作られた機械は煙が出ず、家庭用コンセントがあれば、どこへでも焼きたての甘い芋を届けることができます。病院への導入は、一昨年3月に大田市であった食品研究の発表会で、福田さんと出会い開発中の焼き芋機の試用を提案していただきました。昨年末に栄養治療室では完成版2台を導入しました。

使用方法は、芋を焼く30分前に器械を暖め、芋を焼き始めてから15分から20分で焼き上がりますので、簡単で短時間に出来上がります。薩摩芋ばかりでなくじゃが芋も甘くて美味しく焼き上がります。病棟や部門のイベントに是非活用して下さい。食で患者さんとスタッフの笑顔が誘うことが出来る素敵な取り組みにしたいと思っています。みなさんから要望があれば多くの場所で、多くの患者さんとスタッフまたは学生さんに楽しんで頂くことが出来ます。栄養治療室と共同した新しい企画で是非、皆さんの病棟や部署でも実施したいと思いますので、栄養士に気軽に声をかけて下さい。

一般財団法人
恵雲会

―Hospital-LAWSON―
ローソン島根大学病院店オープン!

一般財団法人　恵雲会　監事　若槻　俊二

去る1月7日、これまでの病院売店「Yショップ・メルシー」に代わり「ローソン島根大学病院店」(売り場面積約166㎡、市内32店目、島根県内102店目)がオープンしました。当日は井川幹夫病院長の挨拶に続いて関係者によるテープカットで船出を祝しました(写真)。病院再開発による大幅な改装に伴い装いを新たにオープンしたもの。正面玄関総合受付コーナーに隣接し、エスカレーターにも近く立地条件は最高です。

ローソンは「みんなと暮らすマチ」の企業理念を病院内にも息づかそうと努めています。

元気になるため、通院している患者様。日常生活に戻るため、入院している患者様。その思いを支えるご家族様。そして昼夜を問わず医療に取り組む医師や看護師、事務職員等々病院には様々な人の営みがあります。病院内コンビニの「ホスピタル・ローソン」は2000年に一号店をオープンし、皆様に喜ばれ、役に立つコンビニを目指しています。

24時間営業で夜間の防犯対策にも寄与し、夜間勤務医師、職員の利便に供することが出来ます。豊富な品揃え、ローソン独自の開発商品、ローソンATM,LOPPi端末サービス(t0t0、BIG、チケット購入)、コピーサービス、FAX 送信サービス、宅配サービス、公共料金の納付等々。ポイントカードを店頭で発行します是非ともお持ち下さい。

なお、ローソンで扱えない医療関連消耗品や島根大学農場で生産された農産品等は別のサービスカウンターで取り扱っています。皆様のご利用をお待ちしております。

オープニングの挨拶をされた井川病院長(写真右)

店内の説明を受ける病院関係者

看護師募集

インターンシップ
病院見学会へ
来てみてね!

教育指導体制が充実した環境で
自分らしくいきいきと働くことができます。

●インターンシップ ●奨学金制度 ●採用試験
について詳しくは

看護部ホームページをご覧ください。

島根大学医学部　検索

お電話でのお問い合わせ　看護部 TEL **0853-20-2478**

国立大学法人 島根大学医学部附属病院
〒693-8501 島根県出雲市塩冶町89-1　TEL.0853-20-2021・2022（総務課 人事担当）
http://www.med.shimane-u.ac.jp/hospital/